
LOVE STORY -Oscar & Rosalia-

Akka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE STORY — Oscar & Rosalinda —

【Nコード】

N8852S

【作者名】

Akka

【あらすじ】

アンジェリーク二次創作。

女王候補を降りて聖地を去ろうとするロザリアと、オスカーの恋物語。殆どゲームはプレイ経験ありませんが、勢いと思い込みで書いていますのでご了承ください。
ひなたさまの「恋したくなるお題」より「手放せない恋のお題」をお借りして投稿しています。

例えば君がいなくなったら（前書き）

？KOEI「アンジェリーク」二次創作
投稿者はゲーム未プレイの上、用語の説明など省いております。それでもいいという方のみ、ご覧下さい。
カップリングはオスカーとロザリアです。

例えば君がいなくなったら

「—————今、何と？」

敬愛する上司の顔を振り返る。

黄金の髪に縁取られた端正な顔。

しかしその表情は最近は見慣れてしまった非難の色が浮かんでいる。

「聞こえなかったのか、オスカー」

一つ大きいため息をついて、諦めたようにゆっくりと繰り返した。

「ロザリアが、今日、聖地を去る」

「—————満足だろう」

そんなわけない。そんなはずが無い。

こんな結果は。

「—————」そう仕向けたのは、お前だ。オスカー」

今更善人の振りをするつもりはない。

非道な真似だと分かっていた。

「—————」ロザリアが、傷つかないとも思っていたのか」

そんなこと、誰より俺が知っている。

気高く凜としたロザリアが、誰より繊細な心を持っていることを。

自分の執務室に戻って、つい先ほどのジュリアスの言葉を反芻する。

張り詰めた気高さを持つロザリアが、この地を去るほど傷ついたなら
ば。

それほどまでに傷つけたのが自分なのだから。

行かせてやるべきだ。

ただ、酷い男がいたとそう記憶するほうが、ロザリアは先に進める。
ロザリアは挫折を知らないが、努力することは誰よりも知っている。
だからロザリアは優雅な反骨精神でもって素晴らしい貴婦人になる
だろう。

そして大輪の花を咲かせた暁には、オスカーのことなど忘れていく。
いつか相応しい男の隣で懐かしさとともに思い出すようになり、そ
の頃にはオスカーの顔も曖昧になり。

決して、『お嬢ちゃん』と呼べるような存在ではなくなり――――。

耐えられる、はずが無い。

憎まれてもいい。

それでもロザリアを宇宙なんかにくれてやるものか。

そんな愚かな傲慢さで、間違った方法で道を閉ざして。

気が付くと走り出していた。

責任感の強いロザリアだ。

自分がいなくなっても不都合が無いように取り計らっていることだ
ろう。

挨拶だっですでに終えているはずだ。

ならば行く先は、次元回廊。

この聖地とロザリアの生家であるカタルヘナ家がある主星を繋ぐ、唯一の道。

どうか間に合ってくれ。

情けないことをしている自覚は十分にある。

長すぎる時を過ごしている間に、誰かと本気で向き合うことが出来なくなった。

そんなことさえ気が付かず、傲慢にすべてを奪おうとした報いを。受けるならば、君の手から。

蹴破る勢いで扉を開けると、ロイヤルブルーの瞳が驚きに揺れた。間に合ったことへの安堵と、準備の整った次元回廊に本当に去る心算だったのだと心の片隅が凍る。

そんなことを自覚したのは、愛しい存在を腕の中に閉じ込めてからだった。

「…オスカー様?!」

距離をとろうと抵抗する腕の力は、あまりにか弱い。

「ロザリア」

「離してくださいませっ」

「ロザリア」

「……名前なんて…呼ばないで!」

紫がかった青い髪に手を差し入れて、小さな頭を左胸に押し付けた。何よりも雄弁であろう、胸の鼓動。

これから語ることが真実であると、伝えるために。

「ロザリア。君が好きだ。愛してる。」

……君を前にすると、こんな陳腐な言葉しか出てこない情けない

俺を笑ってくれ」

どくん、と。

跳ねた鼓動はオスカーかロザリアか。

あるいは二人？

「離してくださいませ」

「嫌だ。君を行かせてしまえば、きっと俺は自分を殺す。頼むから、ここに残ると言ってくれ」

「離してくださいませ！」

叩かれた強さよりも言葉の強さに腕が緩みそうになる。

懇願するしか出来ない自分が愚かで、はじめからそれをしなかった自分は卑しい。

「今さらそんなことをおっしゃらないで！わたくしは、オスカー様の玩具ではありません！」

玩具。

オスカーのロザリアに対する扱いは、傍目にはまさにそれで。

どれほど愚かなことをしてきたのか、ロザリアの一言一言が自覚させる。

「ロザリア、どうか」

好きだ。

愛してる。

「ここに」

ここに、いてほしい。

長すぎる時を過ごすことは、疾うに受け入れた心算だった。

他とは違う時間の流れ。

きっと星に戻っても、オスカーが見知った人々は既に眠りについている。

すべてを飲み込んで、痛みを感じるなどないと思っていた。

それなのにロザリアが自分よりも早い時を過ごすことが受け入れられない。

側に居ないだけなら受け入れられる。

それはとてつもなく苦しいが、互いに背負うものがあるのだから。だが、ロザリアが眠りについた後の世界に何の意味があるだろ。そんな宇宙を守る価値など、どこにもない。

「俺は、君がいない宇宙を守れない。君がいなければ、宇宙を守る意味がない」

あまりに危うい言葉に、腕の中でロザリアが息を呑む。

守護聖として、女王に忠誠を誓う者として、禁忌ともいえる台詞だ。「わたくし…オスカー様がわかりません！そんな嘘をつく必要がどこにありますか？」

「ロザリア。理解してくれなくていい。ただ、受け入れてくれ。

例えば君がいなくなったら、何をおいても見つかるだろう。

君が永遠に眠りについたなら、その骸を抱きしめながら宇宙を壊す。

それが嫌なら、今すぐこの場で俺を殺してくれ」

情熱的とも、脅迫ともとれる言葉に、ロザリアの身体が堅くなる。

解きほぐそうとオスカーはロザリアの長い髪を撫でる。

そうする資格がないことは誰よりも分かっていたけれど。

「わたくし……」

ロザリアの声で無ければ聞き逃していただろう、本当に小さな声。

「わたくし…オスカー様のことが好きでしたの」

過去形で語られる名前に、苦しくなる。

分かっていた。

ただそれは異性を知らずに育ったロザリアのあまりに無垢で、言い方を変えれば気軽な感情だったことも知っていた。

そんなもので満足できないほど、オスカーは囚われてしまった。

高貴で気高い、青い薔薇に。

お嬢ちゃん、とからかっていた少女は、いつしか目を奪われるほどの女性になっていた。

「今はもう、分からない……！」

震える背中が、泣いていることを知らせる。

どうすることも出来なくて、オスカーはありったけの思いを込めて
ロザリアを抱きしめた。

そうすることしか、出来なかった。

痛みを伴う予感（前書き）

前半はいろいろ。

最後はコメディタッチです。

痛みを伴う予感

さわさわと木々の葉が音を立てる。

風景こそ大きく変わらないが、父と馴染みの使用人はロザリアよりも多く歳を重ねたようだ。

「女王になります」と宣言して出てきたときは打って変わって、静かな帰省だ。

大きな旅行鞆だが、自分でも持てる。

女王試験に敗れて卑屈になっているのだと噂する人もいるだろう。それでもロザリアは生まれた家に帰ってきた。

まだ少しだけ、やりたいことがあるから。

ゆつくりと屋敷から出てきた父の頭には、白いものが混ざり始めている。

厳しい表情だが、その中に気遣いが含まれていることくらい、娘なのだから当然分かっている。

そつと鞆を地面に下ろし、深く頭を下げる。

父に。

眠りについた母に。

生まれ育った屋敷に。

カタルヘナという家に。

「ただいま、戻りました」

風に乗って、薔薇の香りがした。

荷物を持ってもらうことも、その片付けの手伝いも断ったロザリアに使用人たちは相当驚いたようだった。

カタルヘナ家の一人娘として生活していた頃、当然のように人任せにしていたことだ。

皆が当たり前のようにしていることの経験もなくて、何が完璧な女王候補だろう。

そう公言して憚らなかった少し前の自分が、滑稽で笑ってしまう。きっと誰よりも早くロザリアがアンジェリークの背中に白い羽を見た。

叱られちゃったと泣きべそを晒していたアンジェリークがこれからどんな顔をして女王をしていくのか、想像すると不敬だけれど面白い。

コンコン、と控えめなノックの音にどうぞと応える。

旅行鞆の中身は殆ど片付けてあるし、部屋の中は見苦しくない程度に整理されている。

「入るぞ」

意外な声に急いで扉を開けに行く。

「お父様……」

決して不仲というわけではないが、ロザリアが記憶する限り父がロザリアの私室を訪ねたことはなかった。

家族団欒の場と個人の部屋は別。

子どもといえどもプライバシーは尊重する。

そういう暗黙の了解がかつてはあった。

「片付けは済んだようだな？」

「ご用でしたらわたくしが伺いましたのに……」

「いや、二人で話があった」

父は窓辺に歩み寄ると、振り返らずに放し始めた。

「以前貰った手紙のときと、決意は変わらないのか？」

張りのない声に胸が痛む。

「はい…。ごめんなさい、お父様。本当に親不孝だと思っておりま
すわ」

女王になれず家の名前に泥を塗り、更に親不孝を重ねようとしている。

でもこれから先の人生で、カタルヘナの名を楯にもあてにもしたくなかった。

完璧とは程遠い、自分が弱いと知っているからこそそうしないといけないと思った。

「お前は…私たちには過ぎた娘だよ」

生まれながらの女王候補。

そう人から言われる娘が自慢でもあり、哀れでもあった。

家訓に従って女王に相応しく育ててきたが、同時に聖地からの呼び出しにずっと怯えていた。

そして親として一番辛かったことは、娘がそれらすべてを飲み込んで
いることだった。

「お父様」

いつの間にか握り締めていた拳を、たおやかな手がそっと包む。

「わたくし、幸せですわ」

そう言って微笑んだ娘の顔を、きっと生涯忘れないだろう。

「どこにいても、お父様のお幸せを祈っております。大好きですわ」

「…嫌なものだな。」

一度は宇宙に娘をくれてやったが…二度目があるとは、な」

「ロザリア：さん、こちらの型はいかがかしら？」

広い室内に所狭しとトルソーが並べられ、そのすべてが純白のドレスを纏っている。

屈指の名門カタルヘナ家とはいえ、複数の有名デザイナーに突貫作業でドレスを作らせるなんてことは滅多にしない。

ロザリアは父のあまりの行動に呆れかえったが、父の照れた横顔にすべて許してしまった。

「ロザリア、とお呼びくださいませ」

「そんな…。様、とお呼びしたいくらいですのに」
相変わらずの距離感に苦笑する。

初めて紹介されて短い期間で、ロザリアはこの穏やかで控えめな女性を好ましく思った。

父とて決して若くはない。

歳を重ねるごとに増していくであろう父の頑固さを、この人は穏やかに包み込み時に諫めてくれるに違いない。ならばこの先の父の人生は幸せだ。

「どれも素敵で迷ってしまいますわ。わたくし、着る物にはそれほど拘らない性質だったのですけれど」

「まあ！ウエディングドレスは別格ですわ」

女の子の夢ですもの、と続ける人のほうが、余程女の子の顔をしている。

生家に戻ってきてから上流を自称する人たちの社交界を泳いできた。そこで待っていたのは女王試験の敗者に対する嘲りとカタルヘナ家の令嬢に対する媚び諂い。

17歳で家を出たときには分からなかった社会のルールを知った。自分は大人だと思っていた17歳の自分は、まさしくあの人が言うように「お嬢ちゃん」だった。

そんなことを受け入れるまで、3年。

今のわたくしを見てあの方はなんと言うかしら？

あれこれ試着をしてロザリアが選り出したのは、シンプルなAラインのドレスだった。

色は純白。

オフホワイトやクリーム系ではなく、光を反射して銀色にさえ見えそうな白だ。

どれはロザリアの髪の色を際立って美しく見せた。

裾に繊細な刺繍がある以外に飾りといえるのは、胸下のリボンと長いトレースくらいだ。

呼び出されたデザイナーは、感嘆のため息をもらす。

「お美しいとは存じておりましたが：まさかこのドレスを着こなす女性がいるとは」

「ドレスに着られていないといいのだけれど？」

「とんでもない！」

気に入った相手のドレスしかデザインをしない気難しいことで有名なデザイナーは勢いよく首を横に振る。

「女神と見紛うばかりですよ」

「ありがとうございます。自惚れてしまいそうですわ」

3年前なら「当然ですわ！」くらい言っていただろう。

「では次は、サムシングフォーね」

サムシングフォーは古くからの習慣だ。

何か一つ、古いもの（サムシングオールド）。

何か一つ、新しいもの（サムシングニュー）。

何か一つ、借りたもの（サムシングボロウ）。

何か一つ、青いもの（サムシングブルー）。

この四つを身につけた花嫁は幸せになれるという。

「サムシングオールドは決まっているのでしょうか？」

ロザリアは小さく頷く。

母が結婚式のときに身につけたティアラと繊細なベール。

目の前の女性に失礼だと使わない心算でいた。だが、父が是非と差し出してきたものを拒否は出来ない。

父にとっても一つの区切りなのだろう。

「サムシングニューは、ドレスと靴。サムシングボロウはいかがしませう？」

「：ボロウは駄目ですわ。お返し、できませんもの」

式の後すぐに迎えが来る手はずになっている。ゆっくりとお礼を言う時間などないだろう。

そんな特殊な事情を思い出して、僅かに沈黙がおちる。

それを殊更明るい声で打ち破り、ロザリアは一つ手を叩いた。

「実は、サムシングブルーはもう決まっておりますの」

ご協力いただけるかしら？とロザリアはデザイナーに微笑みかけた。

カタルヘナ邸の敷地内にある小さな教会で、祭壇の前へ進んでいく。窓から差し込む光が、純白のドレスを一層際立たせた。

この場に居合わせたのは、家族と幼い頃から一緒にいてくれたばあやだけ。

覚悟を決めたロザリアには、それだけで十分だ。

今日を境に、カタルヘナ家の嫡子としてのロザリアはいなくなる。

静寂の中を歩む一步一步に、感謝の思いを込めて。

幼い頃、祭壇の奥のステンドグラスを見上げてはいつかこの場所で花嫁になるのだと夢を見ていた。

それから夢は何度か変わったけれど、こうして今日一つが叶う。

最後の一步を踏み出そうとした、その瞬間。
突如巻き起こった強い風とともに。
こんなに胸を締め付ける、痛みを伴う予感。

「会いたかった」

響く。

深い豊かな低音。

確かめるまでもない。光の粒子を纏って、そこに立つ人。

フレアレッドの髪。

精悍で端整な顔。

アイスブルーの瞳。

あなたは変わらないわね。

わたくしは、少しでも変わったかしら？

差し出された手を取ると、強い力で引き寄せられた。

逞しい腕の中に囚われると同時に、ロザリアの身体も光の粒子に包まれる。

「ロザリアッ！」

尋常ならざる事態だと、現実を追いついた父が声を荒げる。

しかし今のロザリアにはその声はどこか遠い。

フィルターを通したように、どこか不明確なものになっていた。

「お父様……！」

分かっていた。

ロザリアは一度、聖地の時間軸で過ごしている。

次にあちらを選べば、もう戻ってこれないことを。

ふわり、と身体が浮く感覚。

同時にオスカーとロザリアの身体が末端から半透明になっていく。

「ロザリア！」

「お父様！お父様、わたくし……」
残された時間は少ない。

伝えなければいけないことが山のようにあるはずなのに、結局出てきた言葉はとても簡単なものだった。

「ありがとうございます……！」

精一杯の笑顔で、口にする。

微笑みの残像を残して、ロザリアの姿は掻き消えた。

そしてオスカーはロザリアの家族に深く深く一礼し、その場から姿を消したのだった。

「話が違いましたよ？」

オスカーの顔をちらりとも見ずに、ロザリアは言い放つ。

もう少女とは言えない愛しい横顔に、オスカーは高慢に言い放つ。

「君が悪い」

「わたくしっ?!」

「誰のためのドレスなんだ？」

ぞくり、と背筋を這い上がる冷たい声に、ロザリアは思わず顔を向けてしまった。

アイスブルーの瞳は不機嫌に眇められ、口元には捕食者の笑みが浮かんでいる。

「君を選んだ男は最高に興味がいい。だが、敵に回す相手を考えるべきだったな」

「あの、オスカー様？」

思わず女王候補のころの呼び方に戻ってしまった。

「見とれるほどに綺麗になったな。妬けるほどに」

つい、と唇を撫でる指は、これまでに経験したことのない雰囲気を纏っている。

少女から女性へと成長したロザリアを相手に、完璧にどこかのスイッチが入ったらしい。

聖地一のプレイボーイ。

しかしロザリアとて、3年間で多少の経験を積んでいる。

「ロザリア」

低く呼ばれる自分の名前は、どこか危険な甘さを含んでいる。

オスカーが作り出す雰囲気に飲まれそうになりながら、ロザリアは必死に自分を立て直す。

「オスカー様、あなた……」

ぺちん、と小さな音でオスカーの頬を叩く。

痛くもなんともないだろうが、何度か目を瞬く様子で気がそれたことは分かった。

「よろしくて？」

甘い雰囲気を微塵も感じさせずに、ロザリアは通告する。

「わたくしと今上陛下とのお約束はこうよ。

わたくしが聖地を離れる間、何をするのも自由。

わたくしの20歳の誕生日までに、決心が変われば連絡をするにと。

そして今日がわたくしの誕生日で、わたくしはこうして聖地に向かってるわ。

何かご不満はございましたか？」

オスカーが黙りこんだ隙を見逃さずに、言葉を重ねる。

「そしてオスカー様には、別の恨みができましたの。お覚悟くださいませ」

それだけ言うとロザリアは聖地に到着するまで頑としてオスカーを

見ることはなかった。

女たらしで、誰にでも甘い言葉を口にするくせに、どうして変なところで鈍いのかしら。

どうしてこれから聖地へ行こうとする人間が、残していく人と結婚式をするなんて考えられるの？

純白のドレスのなかで、一つ色付いたリボン。

胸下で結んだリボンの色は、アイスブルー。

花嫁が幸せになるための、おまじないをあなたに託したのよ。いいわ。

暫く悩めばいいのよ。

あなたとの結婚式の心算だったの。それをお父様に見せたかっただけ。

真実を知ったとき、あなたはわたくしに謝るしかないわね。

でもね、そのときに教えて差し上げるわ。

あなたがあの場所に来てくれて嬉しかったの。

勘違いでも何でも、強引でも不遜でも。

まるで映画みたいな素敵なお経験じゃなくて？

幼い頃の幼い夢。

幸せなお嫁さん。

あなたはそれを叶えてくれたの。

そう、教えて差し上げるわ。

平気じゃないのは多分俺

次元回廊から聖地へ繋がる扉の前で、ロザリアは深く息をはいた。横に並ぶオスカーが気遣うように視線をよこす。

少し大人になったとはいえ、生来の意地っ張りは改善されるものではなく、ロザリアはオスカーの顔を見ないまま小さな声で問いかけた。

「わたくしが聖地を去ってから、どのくらいの時間が流れていますの？」

ロザリアの過ごした時間は3年。

それに対して。

「今日で35日だ」

「短いわね」

気が遠くなるほど長かった、とぼやくオスカーの言葉は胸に響くけれど、今だけ聞こえない振りをする。

聖地の時間の流れは一定ではない。

何によって定まるのかは不明だ。おそらくは宇宙の意思。

「ロザリア……」

不安に思わないはずがない。

華奢な肩にそっと触れようとしたそのとき、扉の奥に騒音が響いたと思ったと同時に勢いよく扉が開かれた。

金の髪に翠の瞳。

息を荒くして駆け込んできたのは、陛下その人だ。

そしてその後ろにはそんな陛下の行為に頭を抱える首座の守護聖と、他の守護聖まで揃い踏みだ。

なんとも珍しいことに闇の守護聖まで控えている。

集まれといっても中々従わない連中が、自主的に一堂に会するなど珍事以外の何でもない。

「ロザリア〜!!」

35日ぶりの親友との再会を祝おうと広げた陛下の腕は、見事に行き場をなくした。

「流石だな」

「……。」

「あらあら」

「らしい、ね？」

「……………」

「相変わらず、融通利かねえってわけか」

「ロザリア……………」

半泣きの陛下はなんとも情けなく眉を下げた。
それもそうだろう。

再会した親友は目が合うより先に、純白のドレスが汚れるのも厭わずに完璧な臣下の礼をとったのだから。

「そんな寂しいことしないで、お願い！」

陛下の懇願にもロザリアは一切動かない。

頭を下げているのはロザリア。

下げさせているのは女王陛下。

それなのに何故か叱られた子犬のように許しを請うているのは明らかに後者だ。

「…陛下、そうではなく」

あまりに不憫な様子に思わずオスカーは助け舟を出す。
女王になりたての少女には少しばかり酷かも知れない。

だがロザリアは今聖地で何の立場もない一個人だ。

いくらアンジェリークがしきたりや礼儀作法をあまり気にしないと豪語しても、ロザリアは絶対に譲らないだろう。

散々迷った末に、小さくいじわると呟いてアンジェリークは女王としての言葉をかける。

威厳もなにもあったものではないけれど。
一度。

「面を上げ、楽になさい」

ロザリアは微動だにしない。
二度。

「面を上げ…、楽になさい…:…:…」

半分泣き顔のアンジェリークの命令にロザリアはゆっくりと顔を上げた。

三年間で磨きぬかれた、花の顔。

もともと秀麗な美貌ではあったが、以前は堅かった表情が和らぎ思わず目を奪われてしまう。

「お久しゅうございます。陛下、守護聖の皆様」

言葉が終わるか終わらないのうちに、アンジェリークが勢いよく抱きついた。

「会いたかった！すっごくキレイになったわ！」

アンジェリークの真っ直ぐ過ぎる賛辞は流石のロザリアもくすぐったいらしく、僅かに頬を染めて笑う。

その様子を守護聖たちも温かく見守った。

聖地に欠けていたものがぴたりと埋まったと、誰もが感じた。

「辛気臭い顔してんじゃないよ」

私邸で傾けて…否、煽っていたブランデーのグラスを取り上げたのは、悪友と呼べなくもない夢の守護聖だった。

「返せ。極楽鳥。俺は今機嫌が悪い」

じとりと睨みつけるが、オリヴィアはふふんと笑って向かいのソフ

アに腰を下ろした。

「知ってるよ。だからその顔拝みに来たんじゃない」

「……。」

「女王陛下の前じゃ色男も形無しだねえ」

「……。」

反論も出来ずオスカーは額を押さえて低く呻いた。

これが自分の行いに対する女王陛下の罰なのだろうか。

ロザリアが戻ってきたとはいえ、ロザリアとオスカーの間には解決しなければならぬ問題がいくつか残っている。

ロザリアが補佐官に就任する前に、謝罪を受け入れてもらわねば次に進めない。

「……。……。……。」

自分でも呆れるほどロザリアに対して臆病だ。

他が相手なら口先だけの謝罪も、誤魔化すことも簡単に出来るのに、あのロイヤルブルーには嘘がつかない。

だから陛下が「今夜はロザリアとおしゃべりするんだから！」と連れて行ったのはかえってよかったのかもしれない。

こんな状況になってまで、ロザリアの前では少しでも格好よくいたいと思うのだから。

「あんた、馬鹿だよ」

「黙れ……」

オリヴィエの容赦ない一言にますます沈む。

「まさか生きてる間にあんたが恋に夢中になるなんてね」

「夢中？ そんなんじゃない」

そんな生易しい、温かいものじゃない。

ともすればこの身を焼き尽くす熱。

あのロイヤルブルーに必死で、狂ってる。

「あんたもいい加減経験値だけは豊富なんだから、みっともなくじたばたするんじゃないよ」

「お前も、いつ分かるさ」

経験値なんて何の役にも立たない。

ましてや僅かな歳の差など。

むしろ同僚の少年たちの若さが羨ましくなるほど、大人の自分が邪魔をする。

目を眇めてオリヴィエはやれやれとため息をついた。

「私相手にのろけてんじゃないよ。ほら、あんたも入っておいで」
扉の影からそっと顔を覗かせたロザリアは、昼間と同じ純白のドレスを着ていた。

「お姫様連れてきてあげたんだから、感謝してよね」

オリヴィエは、「カティスのワイン1本」と耳元で囁き部屋を出て行った。

「あの…」

「とりあえず、ここに座ってくれないか？」

「え、ええ」

躊躇いながらソファに座るロザリア。二人がけのソファでも微妙に離れた距離が、そのまま今の二人の距離だ。

「頼むから、怯えないでくれ。君がいいと言うまで何もしない」

両手を挙げておどけて見せれば、やっと僅かに微笑みを返された。

「陛下のところにいたんじゃないのか？」

「オリヴィエ様がいらっしゃって、陛下を…なんていうのかしら」

「口八丁の手八丁で丸め込んだか。でも、感謝しないとな」

「それで、伝えなければいけないと、こちらへ」

一度は脱いだドレスを着せて、とびっきりのメイクをしてくれた。

勇気が出るおまじないだと笑うオリヴィエは魔法使いのようだった。
だからほんの少し、勇気を貰って。

「あ…あなたのためなんですの」

「……？」

「ですから、このドレス。あなたのために着ましたの」

「おい、だってそれは……」

どう見てもウエディングドレスで。

信じられない思いでロザリアを見ると、顔を背けて俯いているがその首筋と耳は桃色に染まっている。

「ロザリア、こっちを向いてくれないか？」

「勿論、わたくしが勝手に着ただけですわ！ あなたは何も責任を感じる…違うわ、責任なんてございませんことよ！ 迷惑だとおしゃってもよろしいのですわよ？ わたくしは平気……」

「平気じゃない」

なおも言い募るロザリアの言葉を遮り、オスカーは「何もしない」といった約束を反故にする。

背中から抱き込んだロザリアは繊細に扱わねば壊れてしまいそうなほど華奢で、それでいてしなやかで大きく理性を揺さぶった。

「君に平気だと言われたら、平気じゃないのは多分俺だ」

ロザリアに伝わるだろうか。

大きく跳ねる鼓動が。いつもより高くなった体温が。

「話を聞いてくれないか」

腕の中に閉じ込めたロイヤルブルー。

それに出会った日から、今までのことを。

長い話になるだろう。

でも、それでもいいと思った。

これから始めるのは一夜の恋ではない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8852s/>

LOVE STORY -Oscar & Rosalia-

2011年10月5日00時03分発行